



「愛と和 花のギャラリー ののいち椿館」
テープカットをする栗市長

ごあいさつ

平成 29 年 4 月 5 日

新年度を迎えました。

3月に「第27回全国椿サミット野々市大会」が開催され、全国各地より、たくさんの方々のご来場をいただきました。今も会場の文化会館がにぎわう光景が脳裏に残っており、4月に入ってもその余韻が残っているような気がします。

何年も前から、この3月18日、19日の両日のために職員はもとより、関係する団体の方々をはじめとする皆様のご協力をいただき、準備を進めてまいりました。同じ回を重ねる「花と緑 ののいち 椿まつり」の開会式も18日の朝行われたのですが、自宅から文化会館に向かう道すがら、何度も空を見上げました。過去の椿まつりを振り返ってみると、幾度となく天候に左右されたこともありました。

何度も見上げる空は、雲ひとつない「快晴」です。暖かい春の日差しが野々市全体に広がっていました。市制施行の日は雨が降り、以来、市の大切な事業のときに雨に降られると、この日のことを思い出します。信じられないくらいにすばらしい天気が、椿サミットの2日間を支えてくれました。

全国からお越しいただいた皆様のお話を伺うと、少しお世辞ということもあるのかもしれませんが、こんな椿サミットは初めてだ、関係者だけでなく、市民の皆さんや多くの人に関わっての「おもてなし」を受けた大会だったと、多くの声をいただきました。

市制施行をして5年ということであり、記念式典といったことはいたしませんでしたが、結果として「全国椿サミット野々市大会」が、野々市市制5年の記念式典になったのではないかと思います。それも単なるイベントではなく、関わった皆さんのすべての心のこもった記念すべきものになりました。文化会館、北国街道、そして「愛と和 花のギャラリー ののいち椿館」と「椿山」の中央公園には、両日あわせて、延べ12,600人のお越しをいただきました。この大会を開催してよかったな、私自身が感激感動いたしました。

このサミットを迎える直前に、椿と野々市に関わる古いふたつの文書にふれる機会がありました。ひとつは本市の総合計画の将来都市像にもある「人の和で椿十徳生きるまち」、この「椿十徳」です。これは落語の祖といわれる安楽庵策伝が書いた「百椿集」にあります。その原文にふれる機会があり、すべて読み解くことはできませんが、あらためて「椿十徳」の奥の深さに感じ入りました。

もうひとつは、これも総合計画の中でご紹介している京都聖護院の道興によって書かれた室町時代の紀行文学『廻国雑記』の原文です。道興が白山から、旧河内村、鶴来、本市の矢作、そして野々市を通ったときに詠んだ「風おくる一村雨に虹きえてのの市人はたちもをやまず」の和歌です。突然のわか雨で虹もきえてしまったのに、市は立ったままで雨をよけることなく野々市の人たちは一生懸命働いている、というような意味だと思います。

来場者で賑わう椿サミットの会場は、さながら道興の詠んだ和歌の情景にかぶるようでした。「一村雨」ではなく、快晴のもと、集まる人と、働く「のの市人」が、過去から現在へと脈々とつながっているような気がしました。

今を生きる私たちにとって、これからの未来の野々市へとつなげる責務の大切さをあらためて感じさせてくれる「第27回全国椿サミット野々市大会」でした。多くの市民の皆様のご協力で深く感謝申し上げます。